40年暮らしたオーストラリアを離れ、老後は日本と決めました

神戸〈ゆうゆうの里〉　林　幸一　様（75歳）　令和4年10月　一人入居

オーストラリア時代のご自宅で、娘さん家族と一緒に

オーストラリアは技術者としての僕を大事にしてくれました

父は海外航路の船員で3カ月に一度位帰ってきました。今思えば父の影響で海外を身近に感じていたのでしょうね。35歳でオーストラリア移住を考えました。当時の日本はバブル景気。残業や休出が当たり前という働き方に疑問を感じたことがきっかけでした。オーストラリア政府が技術職の移民を募集していたのです。娘が4歳、息子が2歳の時で、妻は「ついていく」と言ってくれました。

職場は僕のような電子技術を専門とするエンジニアを大事に扱ってくれました。仕事は主にリモートコントローラーや、センサーライトなどの電子回線の開発に携わり、特許も20件位とりました。毎日16時に仕事が終わるので17時にはビーチで泳いだりして、家族と過ごす時間も充実していました。オーストラリアは社会保障が充実しており60歳位でリタイヤする人が多いですが、僕は68歳まで勤めました。

妻が日本食を欲しがったので、毎日つくってホームへ届けました

リタイアしてから一年ほどで、妻に全身の筋肉が衰えて行く病気が発覚しました。それからは妻の介護を中心とした生活になりました。3ヶ月ごとに妻の状態が進行して、杖歩行、歩行器、車いすになりました。自宅での介護を選んだのですが、僕は車椅子移乗のコツなどもわからず、自分が立てなくなったこともありました。自宅介護は二年に及び、はじめは本当に辛かったです。それでも、少しずつ妻の状態を受け入れられるようになりました。

ホームには二年ほどお世話になりました。日本の特養みたいに待つことなく簡単に入れます。オーストラリアはおおらかな国民性で、頼み事をすると「わかりました」と言ってくれるものの、約束が必ず守られるという保証はありません。食事は肉料理が中心。妻は日本食を恋しがったので、毎日僕がつくってホームまで届けました。

妻を見送ってから、老後の選択に帰国という案が

妻を見送り一人になると、僕自身のこれからのことを考えました。勤めている時には、帰国なんか考えもしませんでしたが、仕事を辞めた今ならどこにでも行けます。オーストラリア、日本、ほかの国と選択肢があったけど、介護の質を考えたら日本が良いと考えました。日本食もやっぱり好きです。遠い親戚が京都〈ゆうゆうの里〉に入居していて、10年ほど前、妻と一緒に訪問した時に、鈴蘭台にも〈ゆうゆうの里〉があることを知りました。鈴蘭台は高校時代に、喘息治療のためにきれいな空気を求めて住んだ縁ある土地です。海外暮らしが長かったので、このゆったりした敷地も気に入りました。40年ぶりの日本での暮らしで心配したことは、「日本の気候と人付き合い」でした。YouTubeで日本の人付き合いの仕方を勉強しました。

散歩をサボると海外にいる娘や息子たちからLINEでチェックが入ります

入居してまもなく一年ですが、まずは日本での生活に慣れるよう心がけています。冬の寒さは大丈夫でした。今年、久しぶりの日本の湿度の高い夏を過ごすために、「空調服」（ファン付きの服）を購入して、乗り越える決意です。里ではラジオ体操やジムトレーニングに参加。ご入居者から神戸近隣のおでかけスポットを教えてもらっては出かけています。珍しいものばかりで、徳島県の大塚美術館にも日帰りしました。陶板に西洋絵画を焼き付けた美術館として有名ですが、「どうせイミテーションでしょ」と思っていたところ、本物と変わらない精巧さに圧倒され、また行きたいと思っています。海外で暮らす娘や息子とはLINEでつながっています。アプリを使えばどこにいても、お互いの居場所や移動ルートがわかります。2、3日散歩をさぼっていると娘から「パパどうしたの？」とチェックが入ります。寂しいことはありません。